

## 金子えり子さん告別式「弔辞」

令和元（2019）年7月24日（水）

於：東村山市・ベルホール第一会場

金子えり子さんの旅立ちに際し、謹んで弔辞を述べさせていただきます。先ずは故人のご冥福をお祈りすると共に、ご親族の皆様にご心よりお悔やみを申し上げます。

長年、同じ職場で一緒に活動をし、喜怒哀楽を共にしてきた一人として、ただただ哀惜の念に耐えません。

2012年（平成24）と2018年（平成30）の大きな手術とその後の化学療法を受け、懸命に闘病を続けていましたが、7月21日（日）午前0時19分、遂に力尽き、命の灯は消されました。

『古今和歌集』在原業平の哀傷歌。「つひにゆく 道とはかねて聞きしかど 昨日今日とは思はざりしを」、「つひにゆく 道とはかねて聞きしかど 昨日今日とは思はざりしを」、「つひにゆく 道とはかねて聞きしかど 昨日今日とは思はざりしを」 つかその日がやってくると、心の内では思っていました、昨日今日のこととは思いませんでした。

この場に、全国から寄せられたあふれんばかりの花々、昨日のお通夜、そして本日の数多くの弔問の方々の姿に、故人の人柄と人生が象徴されているように感じています。

金子えり子さんは、いつも「笑顔で」「涼々しく」「心やさしい」、まさしく「え・り・こ」の人でした。いつでもどこでも誰にでも、分けへだてなく、こぼれんばかりの笑顔で接し、挨拶をし、言葉を交わしてくれ、明るく前向きな向日葵（ひまわり）のような存在でした。

涼々しい立ち居振る舞いは、常に颯爽とし、「立てばシャクヤク 座ればボタン 歩く姿はユリの花」の風情でした。

ある時、富山県に皆で講演会に訪れた時には、終了後の会場前で、出待ちの女性スポーツ指導者が立っていました。聞けば、私に用があるのではなく、えり子さんの出待ちでした。理由は、えり子さんの颯爽とした歩きぶりとふくらはぎの美しさでありました。

この8月初旬には、私共が手がけるスポーツ・コンプライアンス教育の学習マンガが発行されます。えり子さんは、その最後の制作・校正作業を病床で続けてくれました。また、私との最後のメールのやりとりは、7月19日（金）の23時13分。職場の会計業務の件でした。その25時間後には帰らぬ人となってしまったのですが、まさに「命、旦夕に迫る」中でも、健気に涼々しく仕事をこなし続けてくれました。

2020年東京オリンピック・パラリンピックを前に、「おもてなし」の言葉が広まっていますが、「心やさしい」おもてなしの応接は、金子えり子さんの真骨頂でした。私共のオフィスを訪れていただく数多くの訪問客一人ひとりに、明るくやさしく温かく応接し、「また来たくなる」ような気持ちにさせてくれました。電話の応対も然りで、ほとんどの相手の方が、えり子さんの明るく元気を声を期待して電話をしてこられ、たまたま私が受話器を取る

と、絶句されてしまい、私に用事があるにも関わらず、恐る恐る「金子さんは居ますか？」  
と言われることもしばしばでした。

闘病・入院中のお見舞い客に対しても、ベッドから起き上がり、お茶やお菓子を出して、  
おもてなしをしようとしてくれ、「入院患者さんは、そんなことしなくていいから」とたし  
なめざるを得ないほどでした。

### 島崎藤村の詩（「惜別の唄」）。

「君がさやけき 目のいろも

君くれないの くちびるも

君がみどりの 黒髪も

またいつか見ん この別れ」

金子えり子さんの元気を姿で、その目のいろ、くちびる、黒髪に、再び接することが叶わな  
い状況となりました。しかし、私達は先ほど述べた「笑顔で凛々しく心やさしい」「えり子の  
三ヶ条」を心に刻み、それぞれ的人生を真摯に生きることを誓います。

するべきことをしなかつたり、しなくてもよいことをしたりすると、きつと「えりちゃんに  
叱られる」ので。

金子えり子さん、今日からは昨日の会場にも流れていた「千の風になって」の歌にあるよ

うに、風になり、光になり、星になって、私達を見守り続けて下さい。

いつか、天空でおいしいビールをまた一緒に飲みましょう。それまでゆっくり待っていて下さい。

「人生は運と縁」。縁があつて運が拓かれ、その運により新たな縁が生まれるものです。金子えり子さんからいただいた縁と運を大切に、また、その恩に對して、心より感謝し、弔辞と致します。

令和元（2019）年7月24日

東京健康リハビリテーション総合研究所長

東京大学名誉教授

武藤 芳照

（当日の朝まで、幾度も幾度も推敲をし直した最終稿）